第 １８ 号

平成１２年１２月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 埼玉県深谷市荒川983
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住　職　髙橋敬行
電話・FAX　048—584—0302

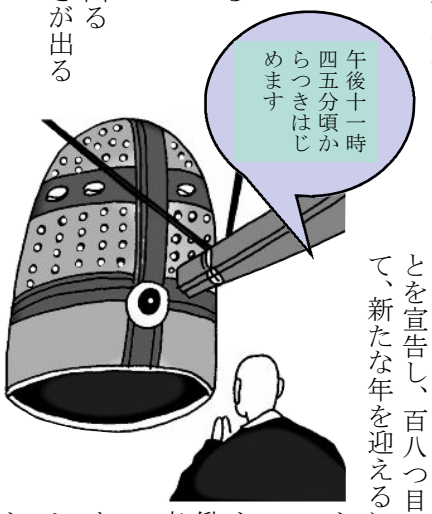
十月十六日埼玉新聞、月曜放談に「出る十五条の教え」と題して面白い記事が載っていたので一部を紹介します。

熊谷市銀座、マロードイン横裏に「藪伊豆」というそば屋がある。帳場のうしろに「出る十五条」が貼ってあり、いつも面白く読ませていただいている。この「出る十五条」を紹介したい。

一、食べ過ぎると腹が出る
一、飲み過ぎると本音が出る
一、好物は自然と手が出る
一、見栄を張ると足が出る
一、困った時は顔に出る
一、議論が白熱すると自我が出る
一、絶好調だと欲が出る
一、人が幸せだと妬みが出る
一、喜びも悲しみも涙が出る
一、物忘れが続くと口惜しさが出る
一、思い通りに行かないと歯痒さが出る
一、不幸が続くと弱気が出る
一、うんと苦しむと愚痴が出る
一、明日を信じれば希望が出る

どの条文を読んでも日常生活の常識をうまく言い表しており、人生の悲哀を感じさせる。

○「食べ過ぎると腹が出る」は、中性脂肪が多くなり諸病のもととなる注意、注意。○「絶好調だと欲が出る」は、あれもこれもは大きな失敗のもととなる。○「飲み過ぎると本音が出る」は、酒は人との交流の潤滑油として、本音で語り合える楽しさを与えてくれる。○「不幸が続くと弱気が出る」「うんと苦しむと愚痴が出る」「明日を信じれば希望が出る」は、いずれも人の世の常でもあるが、確かに不況がこんなに長く続くと愚痴も出る。しかし、うんと苦しめば苦しむほど、知恵も出てくるし不幸を乗り越えることができる。明日を信じれば、希望も湧き、気持ちもすっきりして元気も出てくるものだ。「出る」十五条は、面白いだけではなく、人生の教訓になっている。



百八の煩悩を消す除夜の鐘

大晦日の晩には全国のお寺で除夜の鐘が鳴らされます。除夜とは古い年が押しのけられる夜のことで、大晦日の晩のことです。除夜の鐘は煩悩を解脱し、罪業の消滅を祈って百八回つくとされています。百七つ目は最後の宣命といい、ゆく年の最後に鳴らして煩悩が去ったことを宣告し、百八つ目は、来たる年の最初について、新たな年を迎えるにあたって煩悩にまどわされぬよう眠りをさますといわれています。

「煩悩」とは何だろう。心を煩わし、身を悩ます心の働きであり、悟りという最高目的の実現を妨げるすべての心の動きのことである。煩悩の根源は一般に貪（とん）・瞋（じん）・痴（ち）とされて、これを三毒、三惑などという。

「貪」とは「むさぼり」であり、貪欲である。

「瞋」とは「目をむいて怒ること」、瞋恚（しんに）であり、また嫌悪、悪意でもある。

「痴」とは「おろか」、真実をわきまえない痴愚である。それでは、百八つの煩悩とは何をいうのだろう。

人間は六根という六つの感覚器官―目・耳・鼻・舌・身・意を持っていて、それぞれ六境という六つの対象―色・声・香・味・触・法を理解する。そのとき三不同―好・平・悪の受け取り方があり、その程度は染・淨の二つに分かれる。そのすべてが過去・現在・未来の三世にわたって人を煩わし悩ますので、

六根×三不同×染淨×三世
６×３×２×３＝１０８

合わせて百八煩悩という。

また、人間の六根には、三不同という好・平・悪の受け取り方のほかに、三受という苦・楽・捨（不苦不楽）の感じ方がある、そのすべてが過去・現在・未来の三世にわたるので、

６根×（三不同＋三受）×三世
６×（３＋３）×３＝１０８

という解訳もある。

そのほか、一年は十二ヶ月から成り、一年には二十四節気、七十二候があるので、

１２＋２４＋７２＝１０８

として、そのときどきに人を悩まし迷わすものが合わせて百八つの煩悩であるという説がある。

おもしろいことに、韓国では除夜の鐘は三三回である。

大晦日定めなき世のさだめかな（西鶴）

年の瀬の宝船

年の瀬になると毎年恒例のようにテレビで赤穂浪士の放映がありたのしみです。

1702(元禄十五)年十二月十四日。赤穂浪士の討入りがあった。

この四十七士の中に、俳人であり、浅野家に仕えた大高源吾がいた。号を子葉と言い、〝蕉門十哲〟の一人の宝井其角と仲がよく、しばしば句のやりとりをしていた。大高は浅野家が取り潰しになってからは笹売りになり、また茶人として吉良邸の情報を探っていた。

折りしも討入りの日が決まり、当日、家路に向かうとき、両国橋で其角に会う。

其角が句を投げかける。

「年の瀬や水の流れと人の身は」

それに答えて大高は、

「あした待たるるその宝船」しかし其角には、その下の句の意味がわからない。知合いの侍にこの句のわけを訊くと、その侍は驚いて言った。「これは、たいへんなことが起きるぞ」

ビックリした其角は、わけを訊く。

翌日、四十七士の列の中に大高源吾の姿を見つけたのだった。